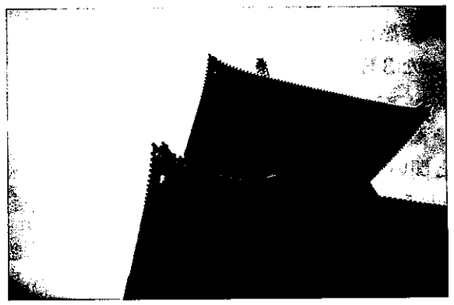
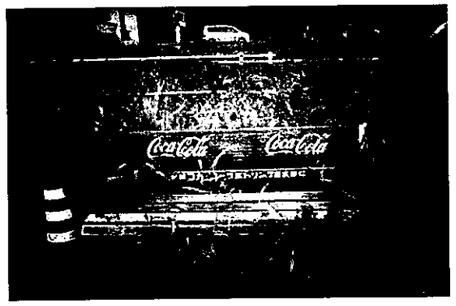
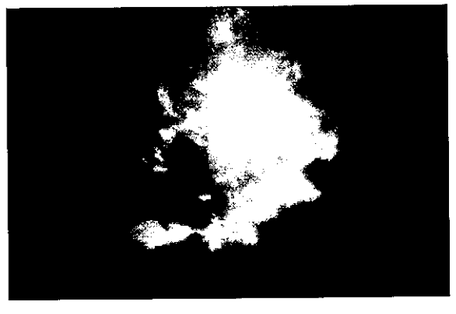








## ホームステイ感想文

陈　咏琦

緊張の気持ちを抱いて８月４日を迎えました。赤岡さんとほかのホームステイの学生と一緒に電車で千葉へ行って千葉教育会館で高柳先生と会いました。ほかの家庭の子供たちが多くいて、ずっと話をしてにぎやかでした。高柳先生は一人で静かに賑やかな人込みに座っていました。私の名前を呼んだ時、高柳先生は笑って私に手を振りました。そんなに親切な人と一緒に３日間を過ごしました。

１日目、私を迎えた後は家へ移動する途中でラーメンを食べました。野菜が多くて麺は歯ごたえがありおいしかったです。そして隣の浪切不動尊に参拝して、高柳先生にその辺の歴史を教えてもらいました。家で高柳先生のお母さんに会った後山武市立こどもえんへ行きました。子供のためのいろんな施設がありました。緑がいっぱいある森公園でおばあちゃんと一緒に散歩しました。夕ご飯のあと横芝小学校教諭廣瀬さんと会って高柳さんの家族と話をしました。畳の上で寝ました。これが日本の生活だと思いました。

２日目、朝早めに起きて健康にいい朝ごはんを食べ、爽やかな感じがしました。高柳先生と妹の助けで初めて着物を着ました。抹茶も体験しました。とても興奮しました。昼ご飯は好きなお好み焼きを食べて廣瀬さんと一緒に横芝光町立小学校へ行きました。そこで中国との異なる文化を見つけることができました。日本の小学校は学力低下の子供たちのために特別な支援室が設置されていました。中国の多くの学校はそんなことはありません。そして山武市歴史資料館を見学しました。高柳さんから歴史の知識を勉強しました。夕方は海で波に追われてビショビショになりました。九十九里海岸のお祭りの沿道でシートを敷いて見学しました。20時15分、砂浜で座って海風に吹かれながら海に上がる花火を鑑賞しました。終わったあと山武教育会館勤務さんの家で足を洗ってトイレを借りました。日本へ来た後は優しい人ばかりに会いました。そのあと廣瀬さんにコインランドリーで靴を洗濯してもらいました。

３日目、朝ご飯は大好きな肉を食べました。家で三角巾の使用方法を勉強していた高柳先生をとても尊敬しました。昼ごはんは高柳先生の妹が作ったカレーライスを食べました。午後はおばあちゃんと別れて千葉市に出発しました。途中で高柳先生の息子さん達のことを聞きました。息子さんも先生でした。今はある福祉施設で助けが必要な人を助けています。そして初めてモノレール乗車を体験しました。辛い別れの後東京へ戻りました。

この３日間、お世話になりました。本当に心から感謝しています。やりたいことは全部やりました。私の日本語はそんなによくはないので、先生、高柳さん、おばあちゃんと廣瀬さんと日本語でペラペラ話すことはできませんでした。しかしみんな根気強かったです。わたしは海を見て嬉しすぎて靴を濡らした時、みんなは親切でわたしの無鉄砲を我慢しました。そして、高柳先生と高柳さんのところでいろんなことを勉強しました。この短い時間にこれほど多くのことを教えていただきまして、ありがたいと思いました。ボランティアになることは私の小さいころからの夢です。高柳先生から赤十字のボランティアのことを聞いたあとはわくわくしました。いつの間にか高柳先生に親密な感情が生まれました。わたしはこれから頑張って日本語能力を上げます。大学へ進学した後ボランティア活動をします。貧しい地域の子供たちとか、戦乱の地域で苦難に見舞われている人を助けます。高柳先生のような尊敬されている人になりたいです。また会う約束をしました。期待しています。

## 夏休み千葉のホームステイ

孫　超

まず、新宿駅南口の改札口のところへ、クラスメイトたちが集まりました。その時、私は日本へ来てまだ２ヶ月ぐらいだったから、新宿駅のことがあまりわかりませんでした。だから、８：30に集まることになっていたのに、私ともう一人の友達は遅れてしまいました。

２時間ぐらい電車に乗ってやっと千葉市に到着しました。こんなことは初めてですから、ちょっと緊張してしまいました。ホストファミリーの方を初めて見た時、優しそうな人だと感じました。とっても優しいおばあさんでした。少し話した後で、私をラーメン店に連れて行ってくれました。たぶん私が自己紹介の中で日本のラーメンが好きだと書いたからだと思いました。

優しいおばあさんの名前はわかっていませんでした。けれど、いつも積田先生と呼んでしまいました。積田先生の家は君津市にあって、到着した時間は午後６：00くらいでした。

第２日目、私をゴルフに連れて行ってくれました。とても楽しかったです。そして市立運動館へも行きました。そこで、積田先生の友達たちに私を紹介してくれました。沢山の人の前で、日本語で自己紹介をしたのははじめてでした。とても緊張しました。私の日本語は、あまり上手ではありませんでした。

第３日目、私を久留里城へ連れて行ってくれました。とても楽しかったです。それは、私が興味を持っているのは日本の歴史だからです。ホストファミリーの人たちは本当に優しかったです。私はホームステイをしている間にいろいろなことをはじめて体験しました。とてもありがたかったです。積田先生のご主人さんと友達たち、息子さんとお孫さんたちも私の世話をしてくれました。とてもありがとございました。今も時々あの時の楽しいことが私の目の前に浮かびます。

## 第３回教育交流シンポジウム（教育交流　研究等助成事業）

昨年度「第２回日中教育交流シンポジウム」と言う形で、日中の学生を中心とする教育文化交流を計画し実施しました。パネラーには、今年度の日本語作文コンクール最優秀賞の宋妍さんと、過去の入賞者等２名と、中国への留学経験がある日本人青年３名を選びました。また今年度は、衆議院議員で日中友好議員連盟の幹事長でもある近藤昭一氏の講演を入れるなど工夫しました。日中を中心とする教育文化交流活動を活発化させるための、大きな意味ある取り組みとして「第３回日中教育交流シンポジウム」も成果を上げることが出来たと思います。今年度も日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして実施しました。

### （１）第３回日中教育文化交流シンポジウム実施計画

1　実施目的　○日本と中国の文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める。
　　○日中両国の文化・教育に対する理解の深まりを、日中両国の友好の礎を担う人材の育成に生かす。

2　実施日時　2018（平成30）年３月３日（土）　13：30～17：00

3　実施場所　日本教育会館９階第５会議室（千代田区一ツ橋２－６－２）

4　参加者
- 日本と中国の青年（中国からの留学生<15人>、日本の学生<15人>、日本の教職員<35人>）
- 協会顧問・理事・評議員・賛助会員・関係者・一般15人
- 全参加者数80名

5　講師・コーディネーター・パネラー
- 講師＝近藤昭一衆議院議員　　演題「日中関係と若者の役割」
- コーディネーター＝日本僑報社・日中交流研究所代表　段　躍中氏
- パネラー＝宋　　妍（第13回中国人の日本語作文コンクール最優秀賞受賞者）
  郭　可純（第12回中国人の日本語作文コンクール一等賞受賞者）
  徐　博晨（東京大学大学院留学生）
  市川真也（早稲田大学四年生）
  宮川　咲（公益財団法人国際文化フォーラム職員）
  鈴木由希（中華圏エンタメライター）
- 講評＝水岡俊一前参議院議員・元内閣総理大臣補佐官

6　選　　定
- 留学生については、日中交流研究所やフジ国際語学院等を通じて公募する。
- 日本人学生については、日中交流研究所や関係団体を通じて公募する。

7　内　　容　講演とパネルディスカッション

8　日　　程　シンポジウム
　13：30　開場・受付
　14：00　開会（黒田理事長挨拶・輿石顧問挨拶）
　14：10　講演
　15：10　交流シンポジウムの方向付け（コーディネーター）
　　意見交流（パネラー）
　　総括（コーディネーター）
　16：50　講評
　17：00　閉会
　　※協会顧問・関係役員・理事・評議員・監査員・コーディネーター・パネラーによる交流会（懇親会）を教育会館内の中華料理店で開催いたします。

## （2）シンポジウム内容報告

### ①講演

**日中友好議員連盟幹事長・衆議院議員　近藤昭一先生**

近藤昭一 先生

シンポジウムの意義づけを踏まえ、内容をより深めていくために、日中友好議員連盟の幹事長であり、中国への留学経験もある衆議院議員の近藤昭一先生に、「日中関係と若者の役割」についてご講演をいただきました。日中平和友好条約締結40周年に当たる今年、改めて両国の歴史・現状・今後について考えることは大変大きな意味があります。近藤先生の貴重な体験を踏まえたお話をうかがうことができ、大いに学習を深めることができました。

先生は、大学時代に中国の北京語源学院に１年半留学をされました。まずその時のお話を聞かせていただきました。何故中国へ留学したのか、そのわけは、「外国で暮らしてみたい。」「あまりみんなが行ったことのないような国へ留学してみたい。」「日本とは政治・社会体制の違う国へ行っていろいろと経験してみたい。」と思ったからだと話されました。そして中国への留学体験が、自分の人生にいかに大きな影響を与えてくれたかについて話していただきました。まず、当時の中国の様子「個人所有の車なんて無かったこと」「サービス精神など無かったこと」、そのことから、「中国が短期間に大きな変化・発展を遂げるなんてとても考えられない。」と、思っていたことを話されました。しかし中国は、あれから驚くべき発展を見せています。「面積も人口も何でもかんでも日本の10倍以上で、あっという間にＧＤＰも日本の2.7倍になり、日本を追い越して世界で２番の経済大国になった。」と指摘されました。それは「中国の人々が熱心に頑張ってきた。」「体制の中でいろんなことを工夫してやってきた。」「政治闘争の中でも、経済政策を推し進めた。」「大きな改革を通して人々が努力してきた。」その成果だと思うと指摘されました。今では、「中国の発展やパワーは脅威だ。」と感じている人が大勢いることも話されました。日中国交回復からつい最近までは、その関係は非常に良好で、お互いがお互いを重要視して、過去の不幸な歴史にもきちんと向かいあおうという関係も生まれてきていたと話されました。そして、「政治は、民間や経済の交流に大きな影響を与える。」という側面があるということから、現在近藤先生が幹事長を務める「日中友好議員連盟」は、国会内で最大の超党派の議員の集まりとなっていること、その活動の歴史についても話していただきました。しかしながらある時期から、尖閣諸島の問題等で日中関係は非常に悪化してきていること、それにつれて日中友好議員連盟の訪中に対しても、国家主席等の中国政府の要人・幹部が出てくることはなくなっていること等について話されました。また、先生の地元である名古屋市は南京市と姉妹都市になっているが、市長の「南京事件はなかった。」の発言以来、全ての公式な行事や交流は止まっていることも話されました。近藤先生は、「中国や韓国・朝鮮やアジアとの関係を良好なものにすることが、自分の大きな政治課題として考えている。」と述べられ、「今だからこそ難しい政治の話をしていかなければ･･･。世の中の多くの人々の雰囲気を変えていかなくては･･･。と考えて、中国での当時の経験やそれに関わるいろんなことをいろんな場面で話させていただいている。」と言われました。たとえば「中国では一度知り合うと『老朋友（ラオ・ペン・ユー）＝古くからの友人』というが、日本人はそう言われると何かとまどってしまう。」とか「中国では宴会で『飲め！飲め！乾杯！乾杯！』で、たまらない･･･。」等のどちらかというと批判的な話について、「中国では本当の心からの友人のことは『自己人（ヅゥ・ヂィー・レェン）＝身内・親しい間柄の人』と呼ぶこと」や、「『酒逢知己千杯少（ヂ（ォ）ウ・ファン・ヂィー・ヂィー・チィエン・ペェィ・シァォ）＝酒は知己（ちき。己を知ってくれている人）と飲めば、千杯飲んでも足りない』という言葉がある」ことについて説明してくれました。文化の違いや体制の違いについて理解し合うことの大切さについて指摘されました。「中国の人には中国の人の文化や考え方、ものの見方がある。日本人と違う。違うところから出発していることを理解しないと駄目だ。」「相手を脅威だと思えば脅威にもなるし、相手だってそう言われれば脅威になる。そうならない関係を作っていかなければならない。」と、日中関係の基本について話されました。「日本にいて、中国のある面だけを強調した情報にだけに接していると、まことに偏った中国像が造られてしまう。」「『実態とは何か』それはかなり難しい問題だと思うが、その実態を伝え合うのが皆さんだし若い人たちだと思う。」その為には、「日本の若い人たちに、ぜひ海外に出てみて欲しい。中国や外国の人々には、ぜひ日本に来てもらいたい。」「中国の若者が沢山日本語を勉強している。中にはそのことでバッシングに遭う人もいる。それでも日本に来ている。日本の学生にも中国にもっと行って欲しい。」と話されました。そして、「日中関係が本当に良くなるためには、お互いの交流を通して、歴史を深く深く理解していかなければならない。日本人の心にも中国人の心にも本当に相手を理解し和解を求めていく、そういう気持ちを起こさせなければ駄目だと思う。」と語り、ドイツのブラント首相がポーランドを訪問したときの謝罪の姿から和解に向かった話や、ドイツとフランスのエリゼ条約の中身について、さらにはＥＵにも触れながら、真の和解を得るために「民間や学生の交流、特に若い人の交流が大切だ。」と指摘されました。まとめとして、「今年は日中平和友好条約締結から40周年。まだまだ課題があるが、さらに深い交流を深めることを、皆さんに期待します。日本中国国際教育交流協会の、教育を通して日中・アジアの歴史を確りととらえていくという大切な活動に大いに期待しています。皆さんのご奮闘をお祈りします。私もいっしょに頑張ります。」と話され、講演を締めくくりました。

日本教育会館９階会議室でのシンポジウの様子

### ②パネルディスカッション

段　躍中 さん

パネルディスカッションは、日中交流研究所所長の段躍中氏にコーディネーターをお願いし、中国の若者（日本語作文コンクール受賞者）３名と日本の若者（中国留学経験者）３名の計６名にパネラーをお願いして行いました。

**段さん（コーディネーター）**に、第13回となった日本語作文コンクールの今までの取り組みの様子や成果について、また、パネラー全員の紹介もしていただきました。さらに、この日中教育文化交流シンポジウムがどういう経過で開催されることになったのかに触れながら、今回のパネルディスカッションの方向付けをしていただきました。

「宋さんには、基調報告のあとで、日本に来て一週間で感じたことの感想発表と日中交流・日中青年の役割について話してください。」パネラーの皆さんには、「まず自分の自己紹介を含めて日中交流についての若者の役割について感じていることを話してください。」と、コーディネートがありました。

**宋さん**からは、まず、パネルディスカッションの基調提案として、日本語作文コンクールの最優秀賞（日本大使賞）テーマ＝中国の「日本語の日」に私ができること～『日本語の日』に花を咲かせよう～の発表がありました。（別項参照）

宋　妍 さん

宋さんは、まず、「日本に来て、沢山の政治家や企業の方々に会い一週間があっという間だった。」「押しボタン式の信号に感心した。中国に輸入したいと思った。」「二階幹事長の言葉『琴線に触れた』が心に残った。」「日本に来たのは３回目で、前の２回は日本語スピーチコンテストで受賞し、招待された。」「はじめ日本語の勉強をすることは恥ずかしかったけど、今は日本語を勉強して良かったなと思ってる。」「日本の企業・団体や沢山の人が、日本語の学習者に多くのチャンスを与えてくれていることに感謝している。」「日本と中国の交流のことに努力している日本人の方々に感謝している。」という発言がありました。

**郭さん**は、「第11回と第12回の作文コンクールで受賞することができた。第12

回の作文は、以前神戸大学に留学したときにホストファミリーだった中井さんのお母さんのことについて書いた。昨年神戸を訪ねて、第12回作文コンクールの作品集をお母さんにプレゼントしたら、自分の名前が載っている本をもらってとてもうれしいと喜んでくれた。ホームステイの時の写真が飾ってあった。そして、『郭さんが神戸にいなくても私の子どもだよ。』と言ってくれた。私はとても感動して、２年前に結んだ絆はこれからも続いていくなと思った。」「小さなこと、その小さなことの積み重ねで、きっと大きなこと立派なことができるだろうとずっと信じている。」「今、社会人として東京で働いている。多くの日本の方々に恩返しがしたいと思っている。私の力は小さいけれど、できるだけ自分なりの努力で、『日中友好の花がもっと綺麗に咲けるように』頑張っていきたい。」という力強い話がありました。

郭　可純さん

徐　博晨さん

**徐さん**からは、「大学の博士課程で日本の海外援助＝ＯＤＡについて専門的に研究しているが、中国は、改革開放以降３兆円以上もの援助を日本から受けている。また、北京外国語学院の日本語研究センターのように日本の援助で設立された学部もある。日本からの多大な援助に対して感謝している」という発言がありました。そして、日中関係については、他の国々の関係とあまり比較しなくていいのではないかという話、「近藤先生の話にあった『ドイツとフランスの関係』についてうらやましいと思うこともある。日米や日台関係は堂々と友好宣伝をしているのに、日中は何故と思うこともある。日中友好と言いながら、私自身もつらい経験を何度も味わったことがある。しかし、他と比較しなくても、今この場に、こんなに温かい人がいる。決して少ない人数ではない。中国13億人、日本１億３千万人の中に、日中友好を真剣に考える人がこんなにいる。ヘイトスピーチなどあるが、そんな人たちより今日ここに集まっているような人の方がずっと多いと思う。だから、私は日中関係について楽観的になっている。楽観的な未来を作っていきたいと思う。」という発言がありました。

**段さん**から、「次に発言してもらう市川さん、宮川さんは、『第１回忘れられない中国留学エピソード』の一等賞受賞者です。近藤先生は、特別賞受賞者です。」という紹介がありました。

市川真也さん

**市川さん**からは、「作文のタイトルは、『現場に行くこと』だった。行ってみて、自分の目で見ることの大切さについて、中国への留学経験を通して考えたことを書いた。」「日本にいて、ネットなんかを見ていると、中国や韓国に対してヘイトに近い考えを持ってしまう。自分もそうだった。」「しかし、大学で中国等からの留学生と交流したり、留学の経験をしたことによって、どんどん自分の考えが変わっていった。」「残念に思っているのは、問題意識を持って動いている若者は、自分の周りにはほとんどいない。たとえば南京事件についても、数の問題はともかくとしても何時どういうことが起こったのか知っている人は、大学４年間で１～２人しかいなかった。歴史教育でそんなことは教わっていない。自分自身もある時までは知らなかった。」「現場に行くことの大切さを思う。南京にも行ってみた。得たものが沢山あった。」「マスメディアが抱えている問題は大きいと思う。中国のマスメディアに対するしめつけや弾圧も気になる。」「南京事件について中国で取材を受けたとき、『こんな悲惨な出来事があったなんて信じられない。』という意味で『信じられません。』とコメントしたら、『市川さんは、南京虐殺を信じていません』と書かれてしまった。」と、具体的に語ってくれました。４月からマスメディア関係に就職するということを踏まえ、「自分がやっていかなくてはいけないことが沢山ある。」と決意を述べていました。

宮川　咲さん

**宮川さん**は、「高校で中国語を勉強し、上海の大学へ４年間留学した。その時経験したことを書いて、作文コンクールに応募した。学校の裏の文房具屋のおば



さんとのエピソードを書いた。よくしてくれたおばさんは、多分日本とか日本人に良い印象を持っていなかったのではないか。あるとき、『日本人なのによくしてくれるのよ。』という、おばさんの立ち話を耳にして、『日本人への印象が私を通して変わったのならうれしいな。』と思った。今でも交流している。」「『第１回忘れられない中国留学エピソード』は、日本語と中国語でそれぞれ出版されている。ぜひ読んで欲しい。自分が経験したことが、他の人につながっていくということが大切だと思う。留学の４年間で経験したようなことは、ある意味で代表として経験したことでもあるので、そのことを皆さんにお伝えしていくということが、経験した者の使命でもあると思う。」と話されました。そして、現在宮川さんが務めている財団の仕事に関わらせながら、「高校生や先生方が、海外特に中国・韓国・ロシアと交流できるイベントを計画し実行している。日本語を勉強する中国人はとても多い。また、中国語を学ぶ日本人もとても多い。学んだ言葉を使う機会が少ない。アニメや何かが好きだから勉強した語学が使える場を作っていく、そして交流しその国の人とつながっていける。そんな場を作っていきたい。」と、熱く語ってくれました。

鈴木由希さん

**鈴木さん**は、国立台湾大学へ留学した時の経験とその後の中国との関わりについて話してくれました。「中国語については、卒論を書くためのツールでしかなく、卒論が終われば…と、思っていた。」というような感じだったところから、「中華エンタメ・コンテンツはものすごく面白いと思い、少しずつツイッターやフェイスブックで、面白いものを勧める活動を始めた。」という、再び中国にはまるきっかけについて話してくれました。「中国のエンタメは、政治や経済の影響を受けるので、突然番組内容が変更になったりする。」「韓国と関係が悪化した時など、人が消えたりした。」「そんなところから、かえってエンタメについても、より深く勉強するようになった。」「政治がどうなっているのか興味を持った。」とも話してくれました。「コンテンツ－アニメ・ドラマ・アイドル etc.－を好きな人が増えている。世界共通のコンテンツは、共通の話題となる。中国のコンテンツも日本でもっと知ってほしい。」「言葉やイメージが壁になっている面があるので、そうしたところを払拭していけるよう活動している。」「こうしたことに興味を持つ人は増えている。」「そういう番組がどこで見られるのか問い合わせも増えている。」「これをもっと大きな動きにして、そこから日中友好という、相手の国を知ろうという、そんなきっかけづくりの種をまいていきたい。」と語ってくれました。

**段さん**から、パネラーに、「**語学の壁について、それをどう乗り越えるか、勉強法や感じていること考えていることを話してください。**」と問いかけがありました。

**宋さん**からは、「日本のバラエティー番組が好きで、その普段使われている日本語から、日本語らしい日本語を身に付けた。」「授業で学んだ日本語は、あんまり使わない言葉があるように思った。」という話がありました。

**郭さん**からは、「日本人の日本語の先生から、『外国語の勉強は、日々の努力の積み重ねだ。』と教わりました。」「毎日、暗記・暗記・暗記で、特に大学一年の時は、教科書を丸暗記した。」「クラスのみんなで、授業の始まる30分位前に、みんなの前に立って、教科書の内容を丸暗記して発表し合っていた。」「１・２年してから、日本語が話せるようになったなと実感した。」と、話してくれました。

**徐さん**は、「自分は日本語学科を出ていない。」「日本語は、環境で学習できる。」「自分は日本に来て、日本の方々と話をしたり、議論をしたりして、そういう中で日本語を学んだ。」「人と交流するというのは、本を読むとかテレビを見るとかと違って、分からない単語があっても何となく通じる。分からない単語が勉強できる。交流の場をもっと広げていくとそこで言葉の勉強ができる。」と語ってくれました。

段さんから、「中国の若者と日本の若者のディスカッションが、中国で行う時は中国語で、日本で行う時は日本語でできたら素晴らしい。是非そんなことをやってみたい。」という発言がありました。「日本語を勉強している中国の若者の日本語のレベルと、中国語を勉強している日本の若者の中国語のレベルでは、大きな差がある。日本語を勉強している中国の若者の方が、レベルが高い。」その辺はどうかという問いかけがありました。

市川さんからは、「日本人が中国語を覚えるのと中国人が日本語を覚えるのでは、中国人が日本語を覚える方が速い。」「中国に留学した時、中国語を話すことは大事で、それができなければ話にならない。」「日中韓の三カ国の若者が、歴史問題を語るシンポジウムに参加した時、日本の若者が一番弱かった。語学コンプレックスがある。しかし、やらなければいけないことは承知している。」という発言がありました。

宮川さんからは、「高校の第二外国語で中国語を選択して、文法等の基礎などやったのだが、全然頭に浮かんでこなかった。」「上海の大学に留学した時、慣れるのに時間がかかった。４年住んでいたので、すぐに口も耳も上達した。語学の上達はやはりそこに住むことかと思う。」「上海の大学にいるとき、校庭やトラックを英語の音読しながら歩いている学生を何回も見た。驚いた。語学の勉強に対する意志の強さを中国の学生に感じた。」と中国の若者の姿を見て、日本の若者はもっと頑張ろうと話してくれました。

鈴木さんは、「日本人が中国語を学んでも、全然しゃべれるようにならない。簡単な会話ならいいが、仕事のことや大切な話は、（日本の国内でも）日本語を習っている中国人につい頼ってしまう。」「そこのところをどうするか、それを乗り越える教育というものを一緒に考えていけたらと思う。」という発言がありました。

### ③講評

前参議院議員・元内閣官房副長官　水岡俊一先生

水岡俊一 先生

水岡先生からは、「去年今年と参加させていただいて、『これからの中日・日中関係をこういう若い人たちが背負って頑張ってくれるんだな。』という期待感を持った。」とまずおっしゃっていただきました。その後、パネラー一人一人について、以下の様に講評をいただきました。「宋さんは、日本人もびっくりするような素晴らしい日本語だ。文章もよく練れていて、もちろん素晴らしいが、それに加えて、話し方・発音・アクセント・間の取り方・と、宗さんの努力と宗さんを指導した方々の素晴らしさを感じた。」「郭さんは、昨年の作文が載っている本をプレゼントした話を聞いて、こういうプレゼントに勝るものはないと思った。心を震わせるものは何かというところが郭さんの心の中にあるんだと感じた。神戸の中井さんは良い方のようですね。神戸には良い人が多い。私も神戸だ。」「徐さんは、沢山話したいことがあるんだなと感じた。その中で、『日台関係を語る人が胸を張っているという話は意味深かった。また、楽観的に物事を考えるということの大切さは、特に研究者世界では必要だと思う。なんでも悲観的になってしまいがちな今の世界にあっての我々の課題の一つではないか。」「市川さんは、自分の目で見る、自分が体験する、自分が聞いてみる、話してみる、尋ねてみる、そして、批判されてみる、そういうことがものすごく大事だということを感じられる人で、そういう人に、マスメディアの世界でぜひ頑張って欲しい。」「宮川さんは、私が経験したことが伝わっていく、伝えていくことは使命ではないか。まさに、前に並んでいる今日のパネラー６名の使命を代弁して言ってくれた。人と人がつながっているということの中において、その経験したことが大事、それを伝えていくことが大事だ。」「鈴木さんは、エンタメコンテンツという、きわめて珍しい話だし、貴重だと思った。自分の経験、そういう見方、そしてそれを自分のペンで、言葉で出されているということは、非常に必要なことだ。物事は、いろんな見方、いろんな角度から見ることが大事だ。中日・日中関係においても、お互いのサイドでどういう風に見るのか、また他の国々からはどう見えるのか、もっと勉強しなければならない。ツイッターやＳＮＳでどんどん発信してほしい。」と話してくれました。そして、まとめとして、「今日の６人のパネラーに共通しているのは、『中国のことを勉強して日本のことが分かった。日本のことを勉強して中国のことが分かった。』ということだと思う。自分の国を、自分を好きにならないと人との交流やコミュニケーションは取れないし、大事なことは伝えられない。これからも明るい中日・日中関係のために６人には頑張っていってほしい。私たちも頑張らなくてはならない。昨年も今年もとてもいい刺激をこのシンポジウムからいただいた。ありがたいと思った。一緒に頑張ろう。」



基調発表　テーマ　中国の「日本語の日」に私ができること

## 『日本語の日』に花を咲かせよう

河北工業大学　宋　妍

去年11月、日本人の先生と大学の食堂へ食べに行ったときの出来事だ。お店の前で、先生と日本語でやり取りしていると、中国人の調理師さんが興味津々でこちらをジロジロ見てきて、突然「あのう、日本人ですね。この牛肉ラーメンが一番美味しいですよ。お勧めですよ。」「こちらでゆっくりお待ちください。出来上がったら、お呼びしますよ。」と親切にゆっくりとした中国語で先生に話してくれた。以前は珍しい光景だったが、昨今このような優しい対応が増えている現状に、先生は驚きというよりは、むしろ喜びを感じているように見えた。「日本人とペラペラ話すなんてすごいじゃん。私にも簡単な日本語を教えてくれない？」と調理師の彼は丁寧に私にお願いするやいなや、日本についていろいろ聞いてきた。なるほど、日本に興味を持っている人は少なくないのだ。

今日、日中貿易が盛んになっているため、中国に進出した日本人や、日本に第一歩を踏み出して日本文化を味わう中国人が次第に多くなっている。頻繁な日中交流の流れのおかげで、中国人の日本人に対する印象も徐々に良くなってきただろう。のみならず、日本語や日本人をもっと知りたい中国人も多くなってきているようだ。だが、残念なことに、日本や日本語に触れ合える場が少ないという問題がある。「日本語の日」は、これを打開するのに、まさにうってつけの火付け役に違いない。

ある日の授業で見たビデオで、東日本大震災で被災者がどれだけ大きな被害にあったのか身にしみるほど感じた。そして、ＮＨＫで「100万人の花は咲く」のミュージックビデオの活動も知った。日本人はもちろん、オーストラリア人までもビデオを投稿した。外国人が歌うと、メロディーにあまり合っていない子供みたいな歌声だったが、いつの間にか、励ましの声が心の底に届き、私もやりたい思いにかられ、職業を問わず、大学構内にいる人に声をかけて誘ってみた。予想外に、歌ってくれた人は多かった。

最も印象に残ったのは、大学の食堂で働いている青年だ。

「あのう、すみません。日本語が全然わかりませんが、参加してもいいですか？」と私は調理師の服装をした彼に声をかけられたので、「はい！もちろんできますよ。教えますから。」と答え、日本語の五十音図からメロディーまで教えた。発音はそれほど正しくなかったが、彼は心を込めて大声で歌ってくれた。

彼のお母さんはお金を稼ぐため、現在日本で働いている。残念なことに、2011年お母さんは日本で地震に遭ってしまった。もともとお母さんとの連絡は少なかったが、その時通信が完全に切れてしまったので、心配でいてたってもいられなかったと教えてくれた。幸いなことに、日本人のボランティアは、彼のお母さんを助けてくれ、地震発生から数日後、彼は連絡が取れた。母を助けてくれた恩返しをずっとしたいと思っていた彼は、今回の活動はちょうどいい機会だと語ってくれた。

今年の母の日に、彼は撮影した動画をお母さんに送ると、受け取ったお母さんは、そんな彼を誇りに思い、すぐに周りの日本人に見せたそうだ。みんな「いいね。」と言ってくれた。小さなことかもしれないが、その価値はみんなに認められた。

この一人の青年のおかげで、参加者が増え、中国人の運転手さんやケニア人の院生も参加してくれた。参加者の幸せな笑顔は、まるで花が鮮やかに咲き誇っているようだ。

「日本語の日」に私一人では大したことができないが、日本語を学びたい中国人や、日本の何かの役に立ちたい中国人など、日本語や日本に触れ合いたい一人でも多くの人と共に、日本語を学びながら、「花は咲く」という歌を歌えば、日本人の心を癒すのはきっとできるはずだ。今、私の大学の人々は「花は咲く」を歌っている。今はまだ小さな活動だが、これが中国全土に広がり、いつか国境を越え、山を通り抜け、日本人の心に届くと信じている。

# 第13回日本語作文コンクール（教育交流　研究等助成事業）

2017年度第13回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の189校から4031編の応募がありました。

募集する作文のテーマは、昨年に引き続き３つでした。

今年は日本と中国の国交正常化45周年の節目の年に当たることから、これを記念して、日中関係のさらなる深化・発展の一助になり得るような意見や提言のある作文を募集したとのことでした。

(1)　日本人に伝えたい中国の新しい魅力

(2)　中国の『日本語の日』に私ができること

(3)　忘れられない日本語教師の教え

日中関係は、今日その結びつきや影響力が益々進化・発展して来ていると思います。そのことを踏まえ、中国の若者ならではの主張や、新鮮な本音がうかがえるような意義のあるテーマが選ばれていると思いました。

協会は積極的にこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）２編を選出しています。本年度の教育賞は、林　雪婷さんの「故きを温ねて新しきを知る」と、邱　吉さんの「日本人に伝えたい中国文化のソフトパワー」でした。

★教育賞・日中国際教育交流協会賞（５万円相当）

東北大学秦皇島分校　　林　雪婷

浙江工商大学　　邱　　吉

## （１）教育賞受賞作品

### テーマ①　日本人に伝えたい中国の新しい魅力

### 「故きを温ねて新しきを知る」

東北大学秦皇島分校　林　雪婷

カンカン、コンコン、ダダダダン。

剣がぶつかり、影が舞う。足音が響き、棒と槍をかいくぐる。

私の故郷、広東省の揭陽市にある伝統舞踊がこの「英歌舞」だ。日本の時代劇の陣や中国拳法の演舞にストーリーをつけたものと言えば想像しやすくなるだろうか。そのストーリーは日本でも有名な水滸伝だ。

幼い私は、初めておばあちゃんに連れられて見に行ったとき、伝統にも舞踊にも味がなかった。家でアニメを見たほうがいいと思っていた。遠くから豪傑たちの隈が目に入った。踊りじゃなくて演劇なのかと思ったとき、突然、銅鑼と太鼓が鳴りいた。両手に短い棒を握り、跳びながらダダダッと演者が集まってきた。始まる！ばあちゃんのことも忘れて、わくわくしながら、次の動きを待っていた。



演者たちが隊形を組み、その隊形が颯爽と変わっていく。円陣になり、方陣になり、八の字になり、放射状になる。一斉に走り、止まり、向きを変え、動きを変える。目の前の演者が、さっと後列の演者と入れ替わり、目を奪う。銅鑼と太鼓に合わせた一糸乱れぬ動きは、まさにダンスだ。カンコンと棒を撃ち合う音が、ダンという足音の響きに重なって心地よい。

舞台の場面が変わり、弥勒菩薩の仮面を被った演者が現れたら、楽器が静かになった。もう終わったのかなとおばあちゃんの方を向いたら、おばあちゃんが笑顔で舞台を指差した。そのとき、また銅鑼と太鼓が打ち鳴らされた。いつのまにか、棒が剣に変わり、槍に変わり、突き、切り、殴り、蹴る。一対一で闘っているかと思えば、二対二になり、さらに仲間が増え、敵が増える。英雄たちの目まぐるしい活躍に目がくらむ。上から下から右から左から攻撃し、それを前に後ろに横に斜めに回転しながら危機一髪で避け、それでも隊列は崩さない。

目の前で見る争いの迫力に怖くなり、おばあちゃんの手を握り締めた。ハラハラ、ドキドキする戦いが終わり、周りから拍手が湧き起こる。私も両手が赤くなるほど手を叩いた。急に拍手が静まる。鉄の警棒を持った朝廷の役人が白馬に乗って現れた。反対側から坊主頭の魯智深が登場した。傲慢な役人が魯智深に敗れ、白馬から転げ落ちて逃げ去る。その後ろ姿を観衆の大爆笑が追いかける。私も胸がすっきりした。豪傑たちの正義感、仲間を救う義侠心、そのかっこ良さに身震いした。

そんな私の様子を見て、おばあちゃんは何度も何度も歌舞劇に連れて行ってくれた。でも、何度も見るうちに、ストーリーがいつも同じだということに気付いた。先が読めるから、興奮が冷め、正直、飽きてきた。

「おばあちゃんは飽きないの？どうして、そんなにこの英歌舞が好きなの？」

また誘われたとき、私はとうとう我慢できずに訊ねた。

「おばあちゃんにはね、辛くて苦しいときがたくさんあったんだよ。そんなときに、この英歌舞がいつも勇気をくれたんだ。」

笑顔で優しいおばあちゃんの予想もしない答えに私は黙ってしまった。

「文革で世の中が変わり、誰もが批判闘争に夢中になったとき、誰を信じていいかわからなくなった。心に霧がかかった辛いとき、あの英歌舞を見て励まされた。その感謝の気持ちがあるから英歌舞を何度も見に行くし、お前が苦しいときにも英歌舞に励ましてもらいたいから何度も連れて行くんだよ。」

私が知らなかったおばあちゃんの辛さと優しさを知り、涙が出そうになった。大学生の今なら、おばあちゃんの気持ちがもっとわかる。この英歌舞は清朝末期から故郷で流行したもの。アヘン戦争という辛く苦しい時期があったからこそ、この英歌舞が民衆を励ましてきた。温故知新の言葉の通り、伝統を教わることで私は多くを発見できた。

このリズミカルで胸踊る英歌舞は、残念ながら日本人に知られていない。困難を乗り越えた世代が、自分たちも孫の世代も励ます英歌舞。この伝統と心を、日本人が知らない新しい魅力として、私は日本人に伝えたい。

### テーマ①　日本人に伝えたい中国の新しい魅力

### 「日本人に伝えたい中国文化のソフトパワー」

浙江工商大学　邱　　吉

私が日本人に伝えたい中国文化のソフトパワーは漢方医学だ。

私の出身は中国の広西チワン族自治区だ。うちはもともと地元の漢方に関わる家柄で、先祖が残した優れた医術を代々受け継いできた。しかし、時代が変わって、西洋医術に人気がどんどん集まり、その影響から漢方医学は衰退してしまった。父は後継の役目を諦め、普通の会社員になった。一人息子の私は、新しい後継者になるべく、物心ついた時から、薬草の匂いの溢れる薬局で、祖父の問診している姿を見ながら育ってきた。しかし、漢方には全然興味を持っていなかった。毎日薬局にくる患者さんも少ないし、お金を稼ぐどころか、毎月赤字だった。そんな状況を見ていられなくて、「お爺ちゃん、どうしてそこまで漢方に拘るの。こんな店、早く閉めたほうがお爺ち

ゃんも楽になるでしょう？」と、ある日そう言った。祖父は何も言わずにただ笑いながら私の頭を優しく撫でて
くれて、また仕事に戻った。

何より漢方を大事にした祖父の気持ち、その時の私には理解できなかった。

2010年の12月、祖父はとうとう過労で倒れた。薬局は閉めることになり、心の支えを失った祖父は毎日ぼんや
りしていた。しかし、ある日突然、一人のおばさんがうちに駆け込んできた。

「先生、お願いします。どうか母を助けてください。」と言い、とても焦っている様子だった。そのおばさん
のお母さんは階段から落ちて、右足を怪我した。立つこともできないお婆さんを病院に連れていったら、高齢で
手術するのも非常に危険だし、有効な薬もないし、もう助ける方法はないと言われた。途方に暮れているとき、
おばさんはかつて有名だった漢方の先生、つまり祖父を思い出し、助けを求めに来たのだ。

祖父は自分の体のことも考えずに、すぐに往診に行った。毎日針灸の治療を施すだけではなく、体に優しい薬
草を煎じて薬にしてお婆さんに飲ませた。祖父の命がけの努力の甲斐あって、お婆さんの右足が段々動くように
なって、最後は自力で立てるようになった。その時のお婆さんの喜びの涙と祖父の幸せそうな顔は一生忘れられ
ない。西洋医術に人気がどんどん集まった時代に、これは正に中国の新しい魅力―漢方医薬の力だ！

祖父がなくなってもう四年が経った。漢方の後継役は叔父が務めることになり、今もその小さい薬局で、祖父
の一番大切な遺産を守り続けている。今の私は大学の日本語科に入ったが、休日にはちゃんと漢方の勉強をして
いる。いつかきっと、頭を撫でてくれているときの祖父の気持ちが分かると信じている。

陰陽五行説の基盤に立って論ぜられていた漢方医学は二千年の歳月を経て、今は国際化されている。シンガポ
ールでは漢方は政府に認められて、ここ数年間に大変な人気となり、国民から愛されている。アメリカでは、漢
方の針灸治療は法制化されて、二万人以上のアメリカ人が免許を得て、針灸に関する仕事をしている。日本では
漢方医学に関する仕事に就いている人は十万人を超え、さらに年々増えている。そして漢方医学教育を行う世界
初の針灸大学も設立された。

先祖の知恵の結晶―漢方医学は確実に、全世界に大きな影響を与えている。漢方医学によって、韓国や日本は
独自の発展を遂げ、特に日本の医薬品メーカーは伝統中国医学の古典「傷寒論」にある複数の漢方方剤について
権利を取得している。また、ここ数年、漢方医薬の効き目が次々に立証され西洋医学との併用で大きな成果をあ
げているのだ。今、中国漢方が医療の在り方を大きく変え始めている。近年、中国政府は保険制度を改革し、
ともと西洋の医療に比べて割安だった伝統医療に新たに保険を適用させた。中国漢方は中国人の誇りであり、
国の新しい魅力であり、私が一番日本人に伝えたい素晴らしい中国文化のソフトパワーだ。



# 資　料　（1）会報「共生力」 26号、27号

公益財団法人日本中国国際教育交流協会
会報 NO.26　　2017.4.24

## 共生力

HP：http://ajciee.or.jp/
Tel：055-269-6533　Fax：055-269-6534
〒400-0031　山梨県甲府市丸の内2-32-16
甲府丸の内マンション302
発行人：黒田文男

## 第２回日中教育文化交流シンポジウム開催

### 奥石顧問が講演・日中の若者が意見発表

コーディネーター・パネラー・財団関係者記念写真

日本と中国の若者の意識に焦点を当て、両国の歴史性を踏まえた関係を考えていくシンポジウムとして、「第２回日中教育文化交流シンポジウム」を２月25日（土）日本教育会館で実施しました。中国からの留学生・日本の学生と教職員・財団関係者・マスコミ等約80名が参加しました。

今回はまず、協会顧問・前参議院副議長の奥石東先生に、「日中交流の意義」について講演をしていただきました。奥石先生は、1972年の日中国交正常化以降の大きな動きについて話されました。毛主席の「水を飲む人は井戸を掘った人を忘れてはならない」と言う言葉や、「21世紀における人類史的なパートナーとして強力に連携していく」という胡錦濤・小沢一郎会談の確認、そして、「第５回日中交流協議会」での王家瑞全国委員会副主席と奥石先生との約束についてなど話されました。日中国交正常化から45年、日中の交流の広がり、とりわけ青年の交流の無限の可能性について話され、日中教育文化交流シンポジウム等の協会の取り組みについて評価され、また期待を述べられました。

奥石顧問による講演の様子

パネルディスカッションは、日中交流研究所所長の段躍中氏がコーディネーターになり、中国の若者（日本語作文コンクール受賞者）３名と日本の若者（大学生）２名、在日本中国人の若者（高校生）１名の計６名のパネラーで行いました。まず白さんから、コンクールの最優秀賞作品「二人の先生の笑顔が私に大切なことを教えてくれた」の発表がありました。その後、パネラー一人一人が、「今日本人について感じていること、思っていること、伝えたいこと」を、発表してくれました。白さんは、「生の日本人と触れ合えば、その素晴らしさが理解できると思う」「日本のいいところを、中国のみんなに伝える役割をしていきたい」と熱く語ってくれました。閻さんは、「日本の高等教育の素晴らしさに驚かされた」「日本の先生は素晴らし、やさしさと厳しさを持っていて、一人一人の学生に寄り添い、人としてのつながりを大切にしてくれる」と、感想を話してくれました。趙さんは、「日本に来て日本人の親切さに感心させられた」しかし、「日中関係は冬の時代だ」「でも、春は必ずやってくる」「中国からの留学生を応援して欲しい、温かく見守って欲しい」と、呼び掛けました。高橋さんは、「北京大学へ留学した時、インターンシップでＣＲＩ（中国国際放送局）の日本語放送（ラジオ放送）を担当した」「ＣＲＩの番組作りの中で、日中関係の改善について取り組んでいた」という驚きを話してくれました。

パネルディスカッションの様子

青山さんは、「世界が自己中心主義的になってきている」「根本にはナショナリズムがある」「烈士という概念を批判するところから試み、それに翻弄されない新たな

歴史観や交流を生み出したい」と話されました。段エディさんは、留学経験を通して感じた国際理解・交流について、「フェイス・ツー・フェイス」「人と人が会うことで友好関係が出来る」「国と国、人と人をつなぐ世界の架け橋になりたい」と話してくれました。

シンポジウムのまとめを、前参議委員議員の水岡俊一先生にしていただきました。「発言内容が素晴らしかった。パネリスト一人一人が、バイタリティーを持っている。着眼点の鋭さ、また、中国の若者の語学能力の高さ、本当に驚かされた。パネリスト達のチャレンジャーとしての多くの目に、大いに期待したいと思う。『人と人の交流を大切にしたい。メディアが世界を変えていく。フェイス・ツー・フェイス』そんな一つ一つの貴重な発言・意見が、ものすごく重く、感じられ考えさせられた。こんな人たちが、将来の中国と日本の関係を創ってくれるんだと心から感じた。」「一緒に頑張って取り組んでいきましょう。」との、力強い講評をいただきました。

## 日本語作文コンクール最優秀賞受賞者白宇さんが「東アジア教育文化交流協会」の奥石先生・水岡先生を表敬訪問

当協会も協力（審査・教育賞授与）して開催された、2016年度第12回日本語作文コンクール（日本僑報社・日中交流研究所主催、在中国日本大使館など後援）には、中国の各省市区の189校から5190編の応募がありました。最優秀賞・日本大使賞（日本に一週間招待）には、白宇さん（蘭州理工大学）の「二人の先生の笑顔が私に大切なことを教えてくれた」が選ばれました。白宇さんは、２月25日（土）に、当協会の顧問・前参議院副議長奥石東先生と前参議院議員水岡俊一先生を、日本教育会館内の「東アジア教育文化交流協会」の事務所に表敬訪問しました。奥石先生からは、日中交流に関する貴重なお話を沢山伺うことが出来ました。

東アジア教育文化交流協会の事務所での様子

## ～ホームステイ参加者も進学～“フジ国際語学院卒業式”

３月２日（木）、フジ国際語学院（山中小白代表＝財団評議員）の卒業式が行われました。1100名を超える卒業生は、今年も東京大学・早稲田大学・東京工業大学などの国公私立大学に進学しました。

フジ国際語学院は1989年の創建で、中国等からの留学生を対象に、「学生が希望する日本の大学・大学院への進学」と、「日中友好の推進力となる人材の育成」を教育方針として、日本語教育、基礎科目教育の徹底指導に取り組んでいます。現在三つのキャンパスに、教職員200名以上、学生在籍者約2000名以上という規模で運営されています。

卒業式は、担任による卒業生の呼名、代表者への証書の授与の流れの中で、先生方と学生達とが喜びの交歓に包まれる素晴らしいものでした。一昨年に教育交流ホームステイ in 山梨に参加した学生たちもそれぞれ志望校に進学しました。ホームステイでの体験を、きっと今後の学生生活の中で生かしていってくれると思います。

卒業証書授与式の様子

## 第29回理事会・第15回評議員会で来年度事業計画・予算が決まりました

３月14日（火）に、財団の第29回理事会と第15回評議員会が、日本教育会館８階808会議室で時間を前後して開かれました。理事・監事・顧問、役員・評議員の出席を得て、2017年度事業計画（山東省泰安市東平県への教育支援・第４次宋慶齢基金会訪日代表団受入・ホームステイ事業・シンポジウム開催等）並びに2017年度予算（総額10,361,000円）が慎重審議の後に、可決されました。

教育会館会議室での第29回理事会の様子

**2017（平成29）年度の取り組み予定**

８月　第６回教育交流ホームステイ
９月　第13回中国人の日本語作文コンクール
10月　第４次宋慶齢基金会訪日代表団
　　第２回日中音楽教育交流会
２月　第３回日中教育文化交流シンポジウム

※ホームステイ・音楽教育交流会・シンポジウムにつきましては、広く呼び掛けて行いますので、協会へご連絡の上、ふるってご参加をよろしくお願いします。



公益財団法人日本中国国際教育交流協会
会報 NO.27　　2017.11.30

# 共生力

HP：http://ajciee.or.jp/
Tel：055-269-6533　Fax：055-269-6534
〒400-0031　山梨県甲府市丸の内2-32-16
甲府丸の内マンション302

発行人：黒田文男

## 第４次宋慶齢基金会教育交流代表団の受入
## 第２回日中音楽教育交流会の開催

### 日中の教師が静岡で交流

富士見小学校音楽室での第２回日中音楽教育交流会

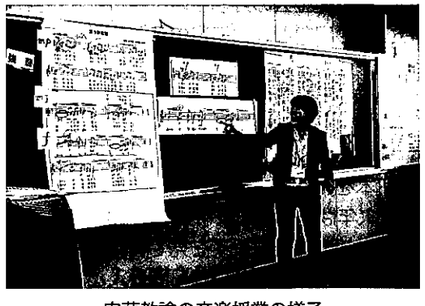
10月29日（日）～11月１日（水）の４日間、静岡県磐田市を中心に、「第４次宋慶齢基金会教育交流代表団」の受入が行われました。これは教育交流受入事業としての取り組みで、「宋慶齢基金会及び基金会が推薦した東平県の音楽教師と音楽教育を中心とした教育交流・研修を行う。」「第２回日中音楽教育交流会を開催する。」を、具体的な目的として行われました。訪日代表団は、宋慶齢基金会基金部項目総合所長の劉さんを窓口に、山東省泰安市東平県教育局の全面的な協力の下に編成されました。また、「第２回日中音楽教育交流会」については、第１回と同様に、日本中国国際教育交流協会・中国宋慶齢基金会・東平県教育局の三者の共催という形で、団のメンバーは、団長として宋慶齢基金会事業発展李部長、同じく基金部公益項目所趙副調査研究員、山東省泰安市東平県教育局学生出資援助センター史主任、同じく第二実験小学校呉校長、東原実験学校李音楽教師、商老庄乡中心小学校張音楽教師、大羊鎮中心小学校史音楽教師の７名でした。

音楽室での授業観察の様子

代表団の受入については、協会の理事でもある静岡県教組の鈴木委員長の全面的な協力を得て行われました。音楽交流会は、昨年度「第１回交流会（東平県で開催）」に参加していただいた神谷校長先生・安藤主幹教諭の勤務する磐田市立富士見小学校を会場に行われました。

代表団は、「第２回日中音楽教育交流会」当日の30日（月）、９時30分に、富士見小学校に到着しました。校長室で挨拶後、さっそく図書室で神谷校長先生による学校の概要説明がありました。10時30分から11時15分までは、４年生の音楽の授業、１年生の図工・音楽、４年生の外国語活動、５年生の体育、６年生の算数・国語と授業参観を行いました。そして、11時25分（４校時）からは、いよいよ安藤主幹教諭による「第２回日中音楽教育交流会」のための実践発表が５年３組の授業として行われました。題材名は、「曲想を味わおう（まっ赤な秋）」で、目標は、「旋律や記号、歌詞を根拠にし、どのような工夫をすると曲想の変化を表現することができるか考え、歌唱表現にいかしている。（音楽表現の創意工夫・表現の技能：歌唱）」でした。学習の展開は、１．発声練習をし「まっ赤な秋１番」を歌う。２．前時を想起し、学習課題をつかむ。３．グループで後半の表現を工夫する。４．全体を２グループにし、聴き合う。５．曲想にふさわしい歌い方を意識して、全員で歌う。６．学習の振り返りを書く。でした。安藤主幹教諭の落ち着いたリードのもとに、児童達が授業者との堅い信頼関係の「安心」に裏打ちされた態度でこの授業の目標に向かって取り組んでいました。

13時30分から行った「音楽教育交流会」の意見交換会の中で中国の先生方から「素晴らしい音楽教育の実践だ」という発言や「日本の音楽教育の水準はとても高い」「中国は日本に学ばなければいけない」とい



安藤教諭の音楽授業の様子

う感想もあり、お互いにとても良い交流会となりました。

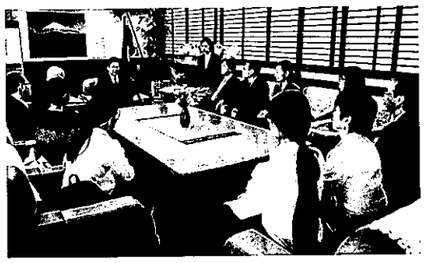
富士見小学校への訪問では、授業参観の他に全校児童による「ダンスタイム」の参観と参加や給食の試食も行いました。代表団の皆さんは大いに満足し、また、とても有意義な訪問になったと話していました。

ダンスタイムの様子

給食試食の様子

富士見小学校での音楽教育交流の日程を終え、代表団は、磐田市庁舎に向かい、渡部磐田市長・村松磐田市教育長を表敬訪問しました。磐田市のイメージキャラクターである「しっぺい」をプレゼントされるなど大歓迎を受けました。また、31日（火）には、ヤマハのピアノ工場を見学した後、静岡県庁において川勝知事を表敬訪問しました。

磐田市長・教育長表敬訪問の様子



静岡県知事表敬訪問の様子

川勝知事は、宋慶齢基金会の井副主席と親しく、自身が訪中したときの思い出など大いに日中交流の話が盛り上がりました。

代表団は、公式な日程を全て終了した後の31日（火）の午後から11月１日（水）の午後の離日までは、浅草・秋葉原・上野などを散策したり、ショッピングをしたりして、大いに日本を見聞してもらいました。羽田でお別れをするとき「来年は是非とも東平県へお越しください。そして、私達の学校の音楽の授業を見てください。」と、何回も話していました。実り多い訪日団受入となりました。関係者の皆様ありがとうございました。

## 『第６回教育交流ホームステイ』今年度も千葉県で実施

千葉県教育会館での記念写真

「中国人留学生の日本語学習の一助として、日本家庭でのホームステイを体験し、ホストとの交流を通して日本語の語学力を磨き、日本人及び日本文化に対する理解を深め、日中両国の友好の礎を担う人材を育成することを実施目的として取り組んできた「教育交流ホームステイ」が、第６回となりました。今年も、千葉県の先生方の協力を得て、８月４日（金）から６日（日）の２泊３日で行いました。千葉県内各地域の７家庭のホストファミリーに、中国からの留学生（日本語研修生）７名が、ホームステイしました。

ホームステイ日程

８月４日（金）

新宿駅に集合→千葉へ、千葉県教育会館でホストファミリーと合流→それぞれ活動にうつる

８月５日（土）

ホストファミリーごとの取り組み（各ホストの計画と学生の要望による体験等）

８月６日（日）

午後千葉県教育会館へ集合→ホストファミリーとのお別れ会・総括会→新宿駅で解散

全体交流会でのお話や感想、アンケートや感想文から、は、７人の留学生・ホストの７家庭とも「とても貴重で忘れられない有意義な時間を過ごせた」とのことでした。千葉駅行きのバス停で、突然何人かの留学生が歓声をあげました。「何か？」と尋ねたら、「赤岡さん、私達、無意識のうちに日本語で話をしていました」と笑いながら答えてくれました。「日本に来ても中国人とばかりいて中国語で話しているから、この３日間はとても新鮮でした。」と大いに成果があったことを実感していました。

お知らせ

**教育交流・研究助成事業**

**「第３回日中教育文化交流シンポジウム」**

日時　2018（平成30）年３月３日（土）
　　14：00～16：30

場所　日本教育会館９階第５会議室

内容　日中両国青年によるパネルディスカッション・意見交換



# 機関関係

## （1）2016（平成28）年度事業報告

### 1．教育交流・派遣事業

①　５カ年計画となる「宋慶齢基金会との新たなプロジェクト＝山東省泰安市東平県との教育交流事業」の２年目として取り組みを進めました。８月22日（月）に、基金会・東平県教育局と共催で、「第１回日中音楽教育交流会」を開催しました。交流会へは、日本から２名の音楽教育実践者＝現場教師（静岡県公立小学校の校長・主幹教諭）を含む６名を派遣しました。中国側からは、泰安市東平県小中学校の音楽教師40名と、教育局及び実験学校の職員20名が参加し、日中合わせて70名ほどで音楽教育の実践交流が出来ました。日中相互に、音楽教育のとらえ方・目標そして具体的な音楽教育実践について発表し、質疑応答等をとおして交流を深めました。音楽教育の相互理解という意味でも、また、実践交流を通して大いに学び合うという側面からも、大いに成果があったと感じられる「第１回日中音楽教育交流会」でした。

### 2．教育交流・受入事業

①　８月23日（火）に、「第４次宋慶齢基金会教育交流代表団」の受入れに関して、黒田代表理事と中国宋慶齢基金会井副主席が中国宋慶齢基金会（北京）で話し合い、2017（平成29）年度内に実施することを確認しました。「宋慶齢基金会との新たなプロジェクト＝山東省泰安市東平県との教育交流事業」を踏まえ、代表団については、山東省泰安市東平県の教育局・教職員を中心に編成することになりました。そして、日本での「第２回日中音楽教育交流会」の実施を目的とする受け入れ事業として、計画・立案・各方面への取り組みを開始しました。

### 3．教育交流・支援事業

①「宋慶齢基金会との新たなプロジェクト＝山東省泰安市東平県との教育交流事業」の２年目として、引き続き山東省泰安市東平県への教育支援を行いました。一つには、「第１回日中音楽教育交流会」という形での音楽教育の研修会を、宋慶齢基金会を通して東平県の教育局と打ち合わせる中で実現させました。二つ目としては、東平県教育局の要望を、宋慶齢基金会を通して具体的に把握する中で、東平県下の小学校への楽器等の寄贈を決定しました。今年度教育支援費100万円については、「第１回日中音楽教育交流会」の実施のための諸経費と楽器の購入費に充てることが確認され、８月上旬の協定締結後、宋慶齢基金会を窓口として東平県へ送金しました。

### 4．教育交流・研究等助成事業

①　中国人等外国人日本留学生は、年々増加しているとはいえ、日本を理解し、日本と母国との友好を担える人材の必要性は、今後とも増大していくことと考えられます。なかでも中国から日本に留学している学生のほとんどは、日本語学校に通学していると思われますが、特に入学初年度は、語学力も十分でなく、学業のみならず生活面でも困難に直面している学生も多いと言われています。こうした留学生の語学力の向上をめざし、日本をより良く理解する人材を育成するために、教育交流・研究等助成事業として今年度で第５回となるホームステイ事業を８月５日（金）から７日（日）の２泊３日の日程で、千葉県で実施しました。最終日のまとめの会での発言の中にも、終了後提出してもらった報告書や感想文を読んでも、このホームステイの取り組みが、留学生・ホストファミリーのどちらにとっても交流・理解・信頼の進展に大いに役立ったことが確認できました。

②　教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させ相互理解を深めるための取り組みとして、昨年度始めて実施した「日中教育文化交流シンポジウム」を、第２回として、２月25日（土）に日本教育会館８階会議室で開催しました。今年度は、第２回と言うことで、参加者の定員数を３倍の約80名にし、内容も協会の興石東顧問の講演を入れるなど工夫しました。日中を中心とする教育文化交流活動を活発化させるための、大きな意味ある取り組みとして「第２回日中教育交流シンポジウム」も成果を上げることが出来たと思いま